

【目的】 近年、日本の若年層において、食生活の変化による咀嚼器官の発達低下に関連した歯科疾患の増加・重症化が問題になっている。この問題解決のためには、従来の栄養面や齲歯予防のための配慮に加えて、咀嚼器官の発達を考慮した食生活指導が必要であると考えられる。前回の報告で、ニューシールランドマオリ族において食生活に年代差が認められ、また若年者ほど不正咬合の割合が高く、歯肉炎の罹患も増加傾向にあるなど、食生活の変化に伴い口腔状況の悪化が生じていることを示した。しかし、日本に比べるとマオリ族子供の口腔状況は極めて健康であることから、マオリ族子供の食生活についてより詳細に検討し、咀嚼器官の発達を考慮した食生活指導案の資料にすることを本研究の目的とした。

【方法】 16歳未満396名のマオリ族子供の食生活・口腔調査結果を解析資料とした。

【結果】 摂取食品数は、朝食が2.0品、昼食が2.3品、夕食が3.5品と日本に比べ少なく朝食においてはシリアルとパン類が、昼食ではパン類、肉加工食品、芋類の順に多く食べられていた。夕食では芋類(61%)がパン類(37%)より多く食べられており、肉・肉加工食品や野菜類と組み合わせで食べられていた。芋類・野菜類の調理方法は、従来通り丸ごと焼いたりゆでる食べ方が多く、芋類については素揚げした食べ方も多かった。いずれの食品についても、蒸したりシチューのような煮込んだ食べ方は少なかった。昼食・夕食で約18%の者がファーストフードを利用していった。以上のことなどから、食生活に西洋化の影響は認められるが、素材に近い従来の食べ方を多く残しているマオリ族の食生活が、咀嚼器官の発達低下を防ぎ口腔の健康と咀嚼器官の発達に役だっていると考えられた。